崇高さに関する抽象的な覚書

A Reflection on the Sublime

A group exhibition conceived by Kazuna Taguchi with structured by Soshiro Matsubara

1. トリシャ・ドネリー
《Untitled》
2016
デジタル映像、プロジェクション
サイズ可変
作家蔵

2.「ル・コルビュジエ ロンシャンの礼拝堂（1955）、フランス、ロンシャン 模型（縮尺1/50）」
建築模型
製作：京都大学工学部建築系3回生＋大学院 加藤研究室
37.5 x 105 x 74 cm
広島市現代美術館蔵

3. 田口和奈
《たゆたう》
2024
ゼラチンシルバープリント
サイズ可変
作家蔵

4. 田口和奈
《Appearance Through the Drape》
2023
ゼラチンシルバープリント
19.4 x 14.1 cm
作家蔵

5. アルマン
《復活》
1985
ブロンズ
73.5 x 46 x 39 cm
広島市現代美術館蔵

6. 岸田劉生
《二人麗子図（童女飾髪図）》
1922
油彩・麻布
100 x 80.3 cm
泉屋博古館東京蔵

7. エミリア・ワン
《至高の飛躍》
2023-24
テキスト（詩集）
18.8 x 12.8 cm

8.「イワオ・カゴシマ展 図録」
発行：永井画廊
1976
印刷物
31.3 x 31.3 cm
個人蔵

9. アンソニー・カロ
［模型］
c.1991
プラスチック
10 x 10 x 10 cm
東京都現代美術館蔵

10. 三木富雄
《耳》
1969
アルミニウム
30 x 22 x 8.5 cm
広島市現代美術館蔵

11. ジョアン・カイガー
《デカルト》
1968
映像
11 min 14 sec
UCバークレー美術館＆パシフィック・フィルム・アーカイブ蔵

12. 田中敦子
《1985-7》
1985
インク、鉛筆・紙
109.3 x 78.8 cm
個人蔵

13. 古屋誠一
《ウィーン 1984》
1984
ゼラチンシルバープリント
37.2 x 24.7 cm
作家蔵

14. 須田国太郎
《牡丹》
1941
油彩・カンヴァス
40.9 x 53.0 cm
公益財団法人 上原美術館蔵

15. ナンシー・ルポ

15-1.《もっと近くに》
2024
ドイツ製陶磁器燭台（主にワイマール時代、またはミッドセンチュリー、東ドイツ製）、
広島市内各所で入手したスチール製フェンス用支柱杭（5ユニット）
17.5 x 150 x 34 cm、
18 x 265 x 14 cm、
14.5 x 398 x 39 cm、
14 x 150 x 27.5 cm、
12.5 x 169 x 25 cm

15-2.《ティナ》
2024
ステンレススチール、ナイロン、オナホール、プラスチック製モーター、バッテリー
50 x 10 x 10 cm

15-3.《ウーナ》
2024
ステンレススチール、ナイロン、オナホール、プラスチック製モーター、バッテリー
50 x 10 x 10 cm

15-4.《ルイーズ》
2024
ステンレススチール、ナイロン、オナホール、プラスチック製モーター、バッテリー
50 x 10 x 10 cm

15-5.《ベッキー》
2024
ステンレススチール、ナイロン、オナホール、プラスチック製モーター、バッテリー
50 x 10 x 10 cm

15-6.《無題》
2024
白色、クリーム色、オフホワイト、グレーのポリエステルシルク製バラの花びら
サイズ可変

15-7.《新しい数字》
2024
トイレットペーパー（イタリア製、ドイツ製、日本製）、
虹色の「スペース・ゲルブ」顔料、
マットメディウム、バルサ材、黒鉛、
フライフィッシング糸（2ユニット）
11 x 43 x 57 cm、12 x 43 x 58 cm

15-8.《無題》
2024
電池式キャンドル、ダンボール箱
20.5 x 26 x 22 cm

すべて作家蔵

16. パトリシア・L・ボイド
《35888》
2018
ゼラチンシルバー・フォトグラム
181 x 412 cm
作家蔵

17. アラン・ロンジノ
《崇高（3）; [NRAS c.182 A>G, p.Q61R (NM_002524.5)（VAF: 36%）]》
*タイトルは作者のDNAの変化によって変更となる場合がある
2024
Ed. 1/1
テキスト・紙、プラスチック製Rxボトル、杏仁（煮沸）
サイズ可変
作家蔵

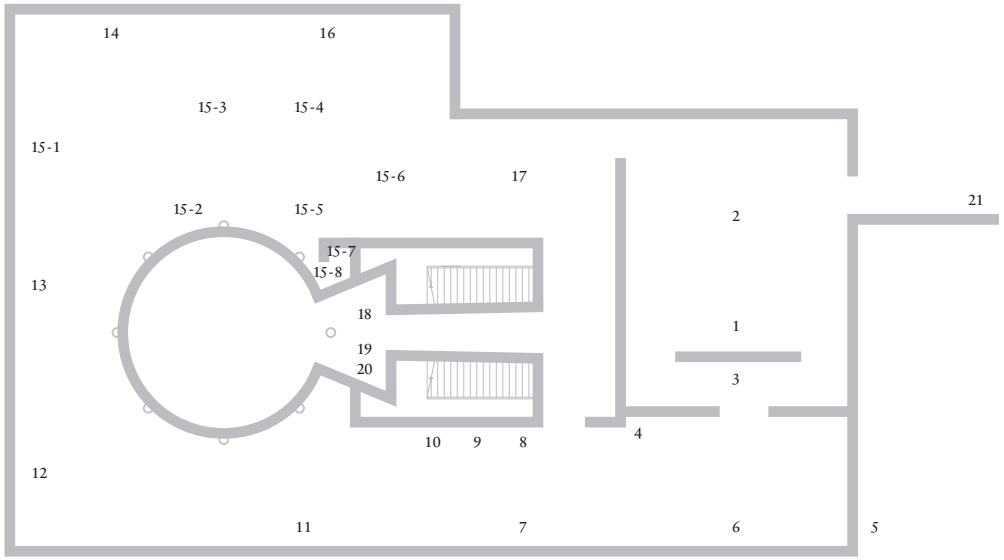
18. ヘンリー・ムーア
《スカートをはいた横たわる人体》
1977
ブロンズ
12.5 x 24.5 x 16 cm
広島市現代美術館蔵

19. クルト・シュヴィッタース
《子犬》
1943-44
ステンレス
41.9 x 21 x 17 cm
広島市現代美術館蔵

20. ジャン・アルプ
《プロフィール》
1955
ブロンズ
31 x 13.5 x 19 cm
広島市現代美術館蔵

21. クレメット
不詳
28.1 x 24.8 cm
制作年不明
油彩・ボード
Haus der Matsubara蔵

寸法は、平面の場合は縦×横、
立体の場合は高さ×幅×奥行の順で記載



ジャン・アルプ｜Jean Arp
［1886-1966、フランス、ストラスブール生まれ、スイス、バーゼルにて没］
「芸術はもともと自然なものであり、人間の昇華によって昇華し、精神化されるのだ。」
「わたしは、新しい外観を創造すること、人間から新しい形をひきだすことを望んだ。」
（「ジャン・アルプ：On My Way」『みづゑ』No.738、1966年8月号）

アルマン｜Arman
［1928-2005、フランス、ニース生まれ、アメリカ、ニューヨークにて没］
「怒り（コレール）」に起因する加虐的な破壊への衝動によって、ヴァイオリンやサキソフォンなどの楽器をスライスしたことから発展した、ヴァイオリンのアキュミュレーション（集積）作品。

ジョアン・カイガー｜Joanne Kyger
［1934-2017、アメリカ、カリフォルニア州、ヴァレーホ生まれ、同州ボリナスにて没］
カイガーはデカルトの『方法序説』を題材にした詩「デカルトと輝き 日々の暮らしの真のドラマ 全六部」とともに、1968年に生涯唯一のヴィデオ作品《デカルト》を制作した。そこでは、「すべてを創造した」「母なる神」について、存在論的な議論を展開している。

イワオ・カゴシマ｜E'wao Kagoshima
［1945–、新潟県生まれ、ニューヨーク在住］
カゴシマが渡米前の1976年2月、永井画廊での個展（1976年2月12日～25日）に際して制作された展覧会カタログ。細密な線描による、シュルレアリスム的な油彩のほか、オブジェ、版画が展示された。

アンソニー・カロ｜Anthony Caro
［1924-2013、イギリス、ニューモールデン生まれ、ロンドンにて没］
安斎重男氏旧蔵の模型。カロが「スカルピテクチャー」と命名した、作品の空間内部に入って体験できる建築的な彫刻を彷彿とさせる。

岸田劉生｜Ryusei Kishida
［1891-1929、東京都生まれ、山口県にて没］
1917年、肺結核の療養も兼ねて移住した鵠沼で、愛娘の麗子をモデルとした一連の「麗子像」を描き始める。《二人麗子図（童女飾髪図）》は、水彩による「内なる美」の探究の後、「東洋の美」への転換点となる作品で、ふたりの麗子が描かれた超現実的な構図の唯一の油彩画として知られる。

クレメット［不詳］｜Klemet
詳細不詳。「Haus der Matsubara」コレクション。

クルト・シュヴィッタース｜Kurt Schwitters
［1887-1948、ドイツ、ハノーファー生まれ、イギリス、ケンダルにて没］
シュヴィッタースの彫刻は、30年代後半以降ますます有機的な形状を帯びるが、本作では構成主義的な要素と融合されている。1941年のイギリス亡命後に制作され、「Little Dog」と英語でタイトルが付けられた。

須田国太郎｜Kunitaro Suda
［1891-1961、京都府生まれ、同地にて没］
絵画の理論と実践を生涯に渡って探求した須田の《牡丹》は、4年間のスペイン留学から帰国したのちに、日本人画家として「東西の絵画の綜合」を目指した結晶のひとつと言える。牡丹を描くときは自宅近くの京都市植物園に通った。

田口和奈｜Kazuna Taguchi
［1979–、東京都生まれ、オーストリア、ウィーン在住］
多重的な構造を持つモノクロームの作品を通じて、時間や空間、あるいは形而上の存在を見出そうとする制作を継続している。（–「A Quiet Sun」プレスリリースより引用）
《たゆたう》は2009年に撮影したフィルム2枚をずらして重ね合わせ、反転させて長時間露光したもの。

田中敦子｜Atsuko Tanaka
［1932-2005、大阪府生まれ、奈良県にて没］
第2回具体美術展（1956年）で発表した《電気服》のための配線図から発展した、単色のドローイング。円と線とが拮抗する関係が流動的なエネルギーを生み出している。

トリシャ・ドネリー｜Trisha Donnelly
［1974-、アメリカ、サンフランシスコ生まれ、ニューヨーク在住］

古屋誠一｜Seiichi Furuya
［1950–、静岡県生まれ、オーストリア、グラーツ在住］
《ウィーン 1984》は、妻クリスティーネ・フルヤ・ゲッスラーの肖像。ウィーン、マルガレーテン通りのアパートで撮影。Polaroid Type 55で撮影されたネガフィルムのフチには薬品の化学変化の痕跡が残っている。

パトリシア・L・ボイド｜Patricia L. Boyd
［1980–、イギリス、ロンドン生まれ、同地在住］
《35888》は、ノース・メルボルンにあるバスシェルターのガラスに密着して光をとらえたフォトグラムである。偶発的な光によって夜間に制作された本作には、ガラス表面の汚れ、落書き、傷、ほこり、交通の往来などが記録される。

三木富雄 | Tomio Miki

［1937-1978、東京都生まれ、京都府にて没］

「耳とはそれらを選択した自己との相対的な関係によって成り立っているものではなく、耳が私を選んだという自己否定の立場から存在するものと考えています。」

（「アンケートに対する回答（特集：ボディ・アート）『美術手帖』1965年、第258号10月号」）

ヘンリー・ムーア | Henry Moore

［1898-1986、イギリス、カッスルフォード生まれ、ペリー・グリーンにて没］

「人体の表現には3つの基本的なポーズがある。立つか、座るか、横になるかだ。（中略）この3つのポーズのうちで、構図の面でも、空間的な状況という点でも、もっとも大きな自由度を与えてくれるのは、横になった姿勢だ。」

（J.D. Morse, 'Henry Moore comes to America', Magazine of Art, 40, no. 3, 1947）.

ル・コルビュジエ | Le Corbusier

［1887-1965、スイス、ラ・ショード・フォン生まれ、フランス、ロクブリュヌ＝カップ＝マルタンにて没］

フランス東部、ジュラ地方の小高い丘に建つロンシャンの礼拝堂模型。1955年竣工。南側壁面に設置された開口部から色ガラスを通して、内部に光が拡散し、光と影が神聖な空間をつくりだす。

ナンシー・ルポ | Nancy Lupo

［1983–、アメリカ、アリゾナ州、フラッグスタッフ生まれ、ロサンゼルス、およびドイツ、ベルリン在住］

《もっと近くに》（2024）は、《Dying Play》（2022）と「[illegible]」（2023）を含む、トリオ作品の三作目で、最後の試みとなる。これらの作品は、恐怖やもの悲しさのような感情的な状態が、日常生活で遭遇する物やインフラに埋め込まれる方法についての瞑想の役割を果たす。今回展示される彫刻作品には、ベルリンの作家自宅近くで入手した、ワイマール・ドイツ時代の磁器製燭台や、広島の路上の各所で現在使われているスチール製の「豚のしっぽの支柱」などが含まれる。

アラン・ロンジノ | Alan Longino

［1987–、アメリカ、ミシシッピ州、ビロクシ生まれ、シカゴ在住］

美術史家、キュレーター。戦後日本のコンセプチュアル・アートに焦点をあてた研究を行なっている。量子物理学、非禅宗、パラ心理学の体系を基盤にした非物質化的実践への松澤宥と彼のアプローチについて研究している。Longino, I.A.H. の創設者でもある。出展作品のタイトル《崇高（3）; [NRAS c.182 A>G, p.Q61 R (NM_002524.5) (VAF: 36%)] 》は、作者のDNAの変化と同期する。

エミリア・ワン | Emilia Wang

［1994–、カナダ生まれ、東京都在住］

《至高の跳躍》は、2023年から2024年に書かれたテキストを集めた冊子であり、そのタイトルは、セーレン・キェルケゴールの『恐怖と震え』からの無名の詩人による引用に由来する。

```
    )(          )(
      ^
<.                  >
      ()
     ( )
  (       )
    /---\
```

※エミリア・ワンの詩集をご希望の方は
スタッフにお声がけください。
数に限りがありますのでご了承ください。

design. Toshimasa Kimura

2024年3月30日［土］－6月9日［日］

主催：広島市現代美術館
協賛：Federal Ministry Republic of Austria Arts, Culture, Civil Service and Sport、
オーストリア文化フォーラム
協力：Air de Paris、エルメス財団、上原美術館
後援：広島県、広島市教育委員会、中国新聞社、朝日新聞広島総局、
毎日新聞広島支局、読売新聞広島総局、中国放送、テレビ新広島、広島テレビ、
広島ホームテレビ、広島エフエム放送、尾道エフエム放送

Federal Ministry Republic of Austria Arts, Culture, Civil Service and Sport

オーストリア文化フォーラム austrian cultural forum

広島市現代美術館
Hiroshima City Museum of Contemporary Art